ISSN 0918−9904

安濃川中流域の考古資料

研究紀要　第15－３号

2006（平成18）年３月

三重県埋蔵文化財センター

序

今号の研究紀要は、「安濃川中流域の考古資料」と題しまして、津市芸濃町雲林院・多聞地内を中心とした考古資料を特集しました。安濃川中流域は、昭和61年度から平成３年度にかけて県営圃場整備事業が継続的に実施され、数多くの遺跡が調査対象となってきました。昭和50年代後半から60年代にかけては、県下全域で圃場整備事業が実施され、当該事業に伴う遺跡の発掘調査もピークの時期でした。しかしその結果、発掘調査そのものに比重がかかり、調査資料の公表に関しては後手に回っていたことは否めません。その結果、三重県を語るうえで重要な資料が、ほとんど公開されることのないままとなったものも少なくありません。

今後はこの反省をもとに、公表が充分でなかった資料を逐次公表し、県民のみなさまをはじめとした各方面で有効活用されるよう務めたいと思います。ぜひとも皆様のご理解とご支援を賜りますようお願い申し上げます。

2006年３月

三重県埋蔵文化財センター
所長　吉水康夫

例　言

1　本書は、昭和63年度農業基盤整備事業（芸濃北部地区）に伴い、三重県教育委員会が緊急発掘調査を実施した三重県安芸郡芸濃町雲林院・多門地区に所在する北奥遺跡・椀田遺跡・出口遺跡の発掘調査成果をまとめたものである。

2　本書で掲載する遺跡と調査年度および発掘調査現地担当は以下のとおりである。
- 北奥遺跡　　宮田勝功・小林秀・平子弘
- 椀田遺跡　　宮田勝功・鈴木克彦
- 出口遺跡　　宮田勝功・鈴木克彦

3　本報告の基となる記録類および出土遺物は、三重県埋蔵文化財センターで保管している。

4　当報告書の作成業務は支援研究グループが行った。報告文の執筆は伊藤裕偉・奥義次が、遺物の写真撮影は田中久生が行った。本書の編集は伊藤が行った。

本 文 目 次

Ⅰ　北奥遺跡……伊藤　…（1）
Ⅱ　出口遺跡……伊藤　…（26）
Ⅲ　椀田遺跡……奥　…（27）
Ⅳ　雲林院・多門地区の遺跡動向……伊藤　…（32）

挿 図 一 覧

第１図　安濃川中流域の発掘調査地点位置図
第２図　調査区周辺地形図
第３図　北奥遺跡調査区位置関係図
第４図　北奥遺跡調査区土層
第５図　北奥遺跡Ａ地区平面図(1)
第６図　北奥遺跡Ａ地区平面図(2)
第７図　北奥遺跡Ｂ地区平面図
第８図　北奥遺跡Ｃ地区平面図(1)
第９図　北奥遺跡Ｃ地区平面図(2)および焼土坑ＳＸ28実測図
第10図　北奥遺跡Ａ地区詳細図(1)
第11図　北奥遺跡Ａ地区詳細図(2)
第12図　北奥遺跡Ａ地区詳細図(3)
第13図　北奥遺跡Ｂ地区詳細図
第14図　北奥遺跡Ｃ地区詳細図
第15図　北奥遺跡出土遺物(1)
第16図　北奥遺跡出土遺物(2)
第17図　北奥遺跡出土遺物(3)
第18図　北奥遺跡出土遺物(4)
第19図　硯（214）の線刻
第20図　北奥遺跡出土遺物(5)銭貨
第21図　出口遺跡調査区平面図
第22図　椀田遺跡関係図
第23図　椀田遺跡出土遺物(1)縄文・弥生土器
第24図　椀田遺跡出土遺物(2)弥生土器
第25図　椀田遺跡出土遺物(3)古墳時代以降の遺物

表 一 覧

第１表　北奥遺跡検出遺構一覧
第２表　北奥遺跡検出掘立柱建物一覧

写真図版一覧

写真図版１　北奥遺跡(1)
写真図版２　北奥遺跡(2)
写真図版３　椀田遺跡

凡 例

＜地図類＞

1　本書で使用した地図類は、安芸郡芸濃町平面図（1964年）である。

2　この地図は、国土調査法の日本測地系による座標第Ⅵ系（旧国土座標）で表現されている。

3　発掘調査に関する座標も、旧国土座標第Ⅵ系で示している。挿図の方位は全て座標北で示している。なお、磁針方位は西偏６°40′、真北方位は西偏０°17′34″（平成７年）である。

＜遺構類＞

4　土層図は、層の区分を実線で、調査区壁面および採録深度に相当する部分を一点鎖線で表現している。また、遺構面や層位の大区分となる層については、他の土層線よりも太い線で表現した。

5　土層図の色調と土質は、調査担当者の記載をそのまま用いた。

6　当報告書での遺構は、それぞれの遺跡単位で通番としている。

7　遺構図のうち、砂目のスクリーントーンで示した部分は、焼土の範囲である。

8　遺構番号の頭には、見た目の性格によって、以下の略記号を付けている。

ＳＡ‥‥柱列　ＳＢ‥‥掘立柱建物　ＳＤ‥‥溝、　ＳＥ‥‥井戸　ＳＨ‥‥竪穴住居　ＳＫ‥‥土坑
ＳＸ‥‥墓　　ＳＺ‥‥落ち込みなど　　ｐｉ‥‥ピット、柱穴

＜遺物類＞

9　当報告での遺物実測図類は実物の1/4を基本としている。それ以外の縮尺のものについては、その都度指示している。

10　当報告書での用語は、「つき」は「杯」、「わん」は「椀」に統一している。

Ⅰ　北奥遺跡

1　調査の経過

北奥遺跡は、安芸郡芸濃町雲林院字井ノ上から多門字北奥にかけての地に所在する遺跡である。発掘調査は昭和63年度県営圃場整備事業に伴い、1988年5月9日から開始し、同年10月13日に終了した。最終的な調査面積は4,600㎡であった。

発掘調査地はＡ～Ｃ地区の３地区である。遺構図は、Ｃ地区の一部を除き、航空写真測量による。

2　位置と環境

北奥遺跡は、安濃川上流南岸部の河岸段丘上に位置する。当地の標高は約68mで、安濃川寄りの北部ではやや低くなっている。当地の所在する多門地区の現況集落は、調査区の南部にあたる。したがって、「北奥」の名称は、多門集落から見た「北の奥の方」という意味かと考えられる。

当遺跡の周辺には、縄文時代から中世戦国時代に至る遺跡が多数確認できるが、なかでも古代と中世の遺跡が充実している。北奥遺跡とは川を挟んで対岸に当たる椋本南方遺跡・松山遺跡では、奈良時代から鎌倉時代に至る広大な集落跡が確認されている。椋本地区は鈴鹿駅家を発し伊勢神宮へと至る官道（伊勢道）が通過する地点と考えられ、松山遺跡で確認された道路状遺構は、これに関係するものと考えられている[1]。

中世では、安濃川北岸の大石遺跡で堀を伴う屋敷跡が確認されている[2]。この遺跡は北奥遺跡が衰退する13世紀前半頃から16世紀頃にかけて盛行しており、北奥遺跡との時間的な連続性が注目できる。

中世後期では、当遺跡の西方約３kmに雲林院城跡が築かれる。15世紀後半から16世紀にかけては雲林院氏の存在が確認できる。雲林院氏は長野工藤氏の一族で、対外的には北畠氏との関わりも有していた。雲林院氏が当地を本拠としていた時期の良好な遺跡が、当遺跡の西方約500mにある下川遺跡である[3]。

以上のように、北奥遺跡周辺では、とくに古代・中世にあたる時期の遺跡が良好に展開している。

3　調査区の基本層位

調査区は、現状での標高約67～69mで、上位河岸段丘面に相当する。第４図に示したＢ・Ｃ地区の土層断面図を見ると、遺構の基盤となるのは黄褐色粘質土である。現況地表面から遺構基盤層までは40～60㎝の堆積土が見られる。遺構面直上に堆積している暗褐色土は、当時の生活面および遺物包含層に相当するものであるが、この層の遺物含有量はあまり多くなかった。

4　検出した遺構

発掘調査の結果確認された遺構は、奈良時代から江戸時代にかけてのもので、出土遺物には縄文時代のものも含まれる。

以下、各地区ごとに主立った遺構の状況を見る。なお、後掲の遺構一覧表も参照されたい。

a　Ａ地区の遺構

Ａ地区では、奈良時代～近世にかけての遺構が確認されている。竪穴住居・掘立柱建物・土坑・溝のほか、埋納遺構や道路遺構がある。

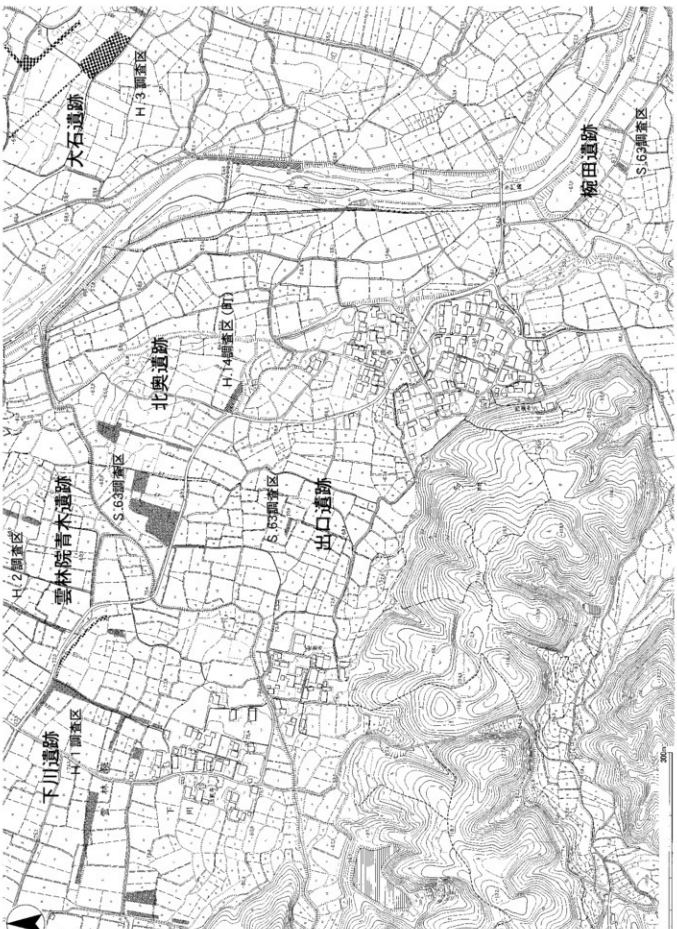
竪穴住居はＳＨ１が確認された。奈良時代の遺構と考えられる。

掘立柱建物は５棟、柱列は２条ある。ＳＢ58・59・60・61は奈良時代から平安時代前期、ＳＢ63・ＳＡ62・64は平安時代後期前後の遺構と考えられる。

土坑では、鉄製鞘先１点と鉄鎌２点が出土したＳＫ５が興味深い。正確な時期は不明だが、奈良時代後期以降平安時代末期までのものと考えられる。

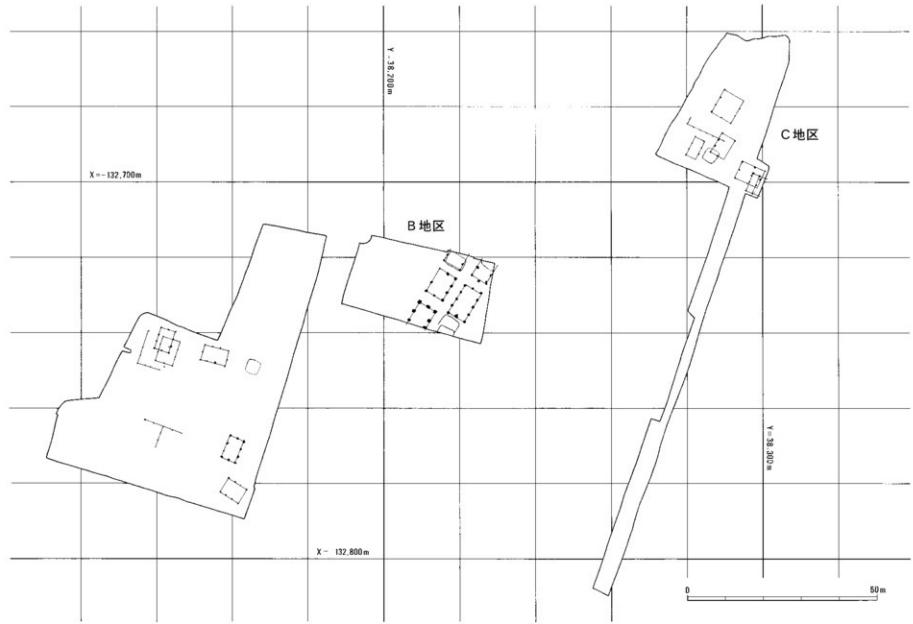
道路遺構にはＳＤ７がある。南側に円弧を描くように巡る溝で、溝の南部は砂利が敷き詰められている。ＳＤ７が側溝で、砂利敷部分が路面と考えられる。側溝から13世紀前半頃の土器が出土しているが、遺構の時期は決め難く、遡っても13世紀前半頃と見ておくべきであろう。

b　Ｂ地区の遺構



第１図　安濃川中流域の発掘調査地点位置図（１：6,000）　（「安芸郡芸濃町平面図」1964年より）

第２図　調査区周辺地形図（１：2,000）　破線は事業計画線



第３図　北奥遺跡調査区位置関係図（１：1,000）　　※国土座標は1988年段階のもの

B地区では、奈良・平安時代の遺構が確認されている。竪穴住居・掘立柱建物・土坑・溝がある。多くの遺構は調査区東部に集中する。

このうち掘立柱建物と竪穴住居は、奈良時代末頃から平安時代中葉頃にかけてのもので、とくに平安時代前期頃の遺構は、掘立柱建物と竪穴住居が規則的に配列されていると考えられる。掘立柱建物・柱列は合計７棟検出され、N31° E方向を軸線として２列の並びが確認された。

土坑では「南」と墨書された奈良時代末頃の土師器杯が出土したＳＫ12がある。

c　C地区の遺構

C地区は、面調査となった北部と、排水路部分に相当する細長い調査区とがある。遺構は、奈良時代、平安時代後期～末期、および室町時代の遺構が確認されている。

竪穴住居はＳＨ46がある。奈良時代後葉頃と考えられる。

掘立柱建物は５棟、柱列は１条ある。概ね平安時代後期頃のものが多い。

火葬坑として、ＳＸ28がある。長辺約90㎝、短辺約65㎝の長方形を呈する遺構で、土坑外面は被熱により赤く変色している。内部には木炭と骨片が混在していた。埋土内からは唐・北宋銭が合計６枚出土した。南北朝～室町時代頃の遺構と考えられる。

土坑には、出土土器が多い遺構が見られる。ＳＫ15・17は平安時代後期頃、ＳＫ38は鎌倉時代頃、ＳＫ23・26からは室町戦国期の土器類がそれぞれまとまって出土している。

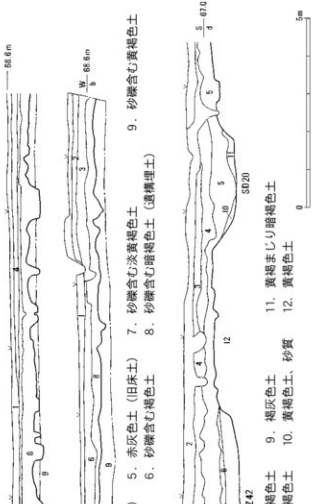
5　出土した遺物

出土遺物には、縄文時代早期から近代に至るものがある。主立った出土遺物を記述する。

a　A地区の遺物

縄文土器（１～４）　１は早期末の深鉢で、高山寺式に相当。外面にはポジティブな楕円押型文、内面には斜行沈線が施される。２～４は後期の土器で、２の外面には巻き貝条痕文が施されている。３は宮滝式に相当する。４は磨消縄文と沈線が確認できる。

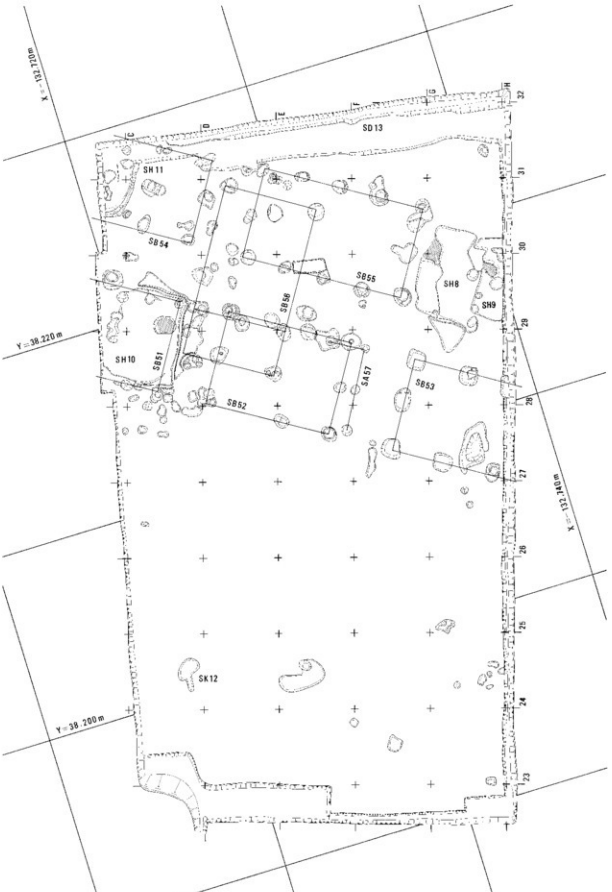
土坑ＳＫ５出土土器（５）　５は土師器皿Ａで、８世紀末から９世紀初頃頃のものである。



第４図　北奥遺跡調査区土層（１：100）

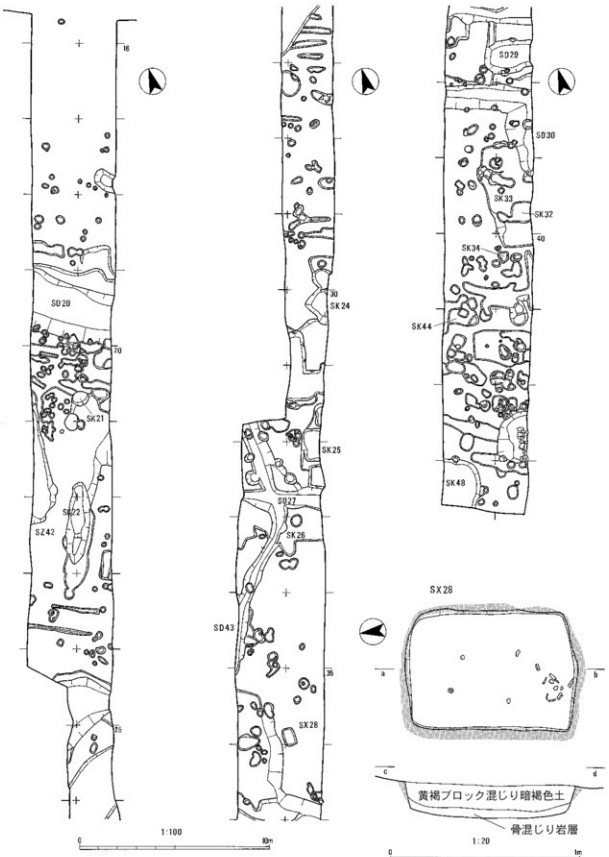
第５図　北奥遺跡Ａ地区平面図(1)（１：200）

第6図　北奥遺跡A地区平面図(2)（1：200）

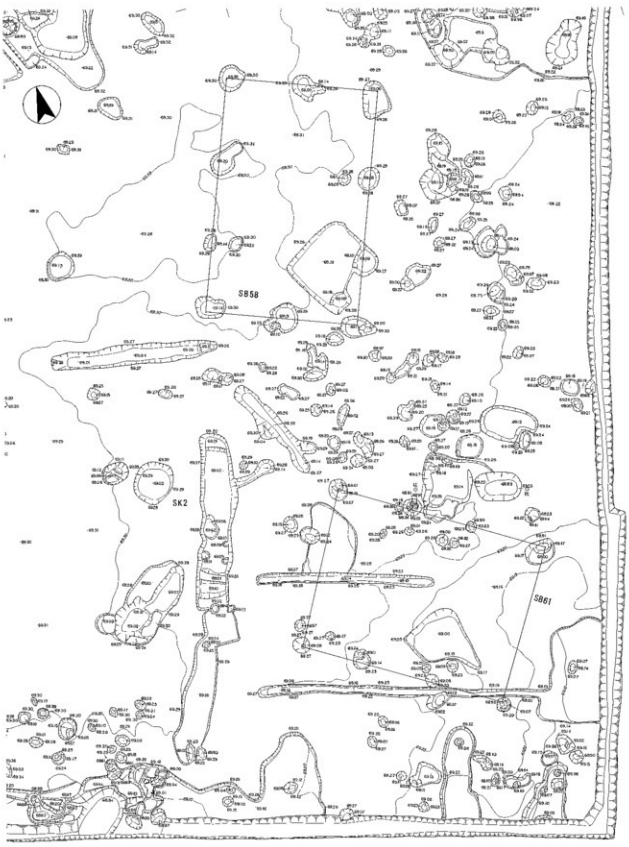


第７図　北奥遺跡Ｂ地区平面図（１：200）

第８図　北奥遺跡Ｃ地区平面図(1)（１：200）

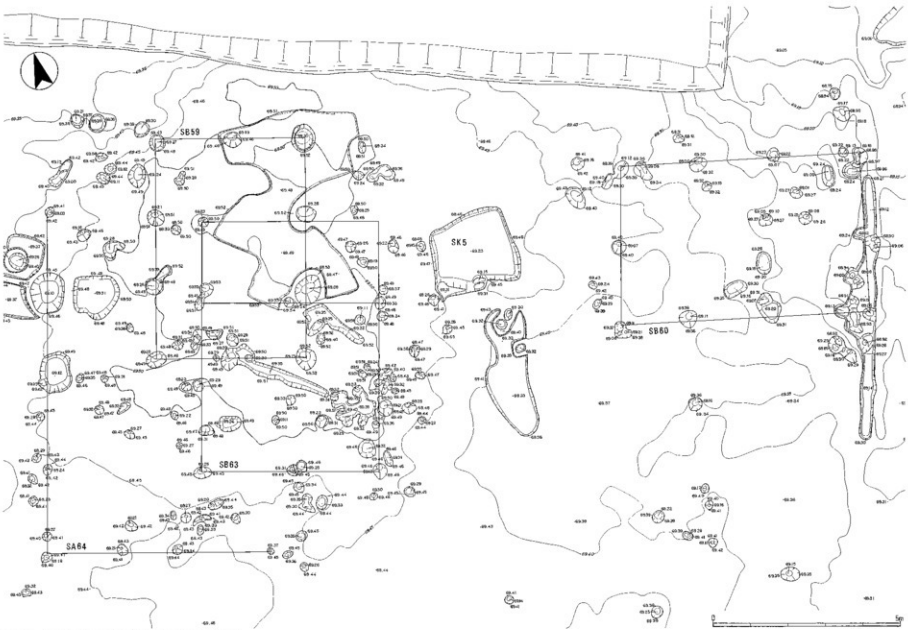


第９図　北奥遺跡Ｃ地区平面図(2)および焼土坑ＳＸ28実測図（１：200）

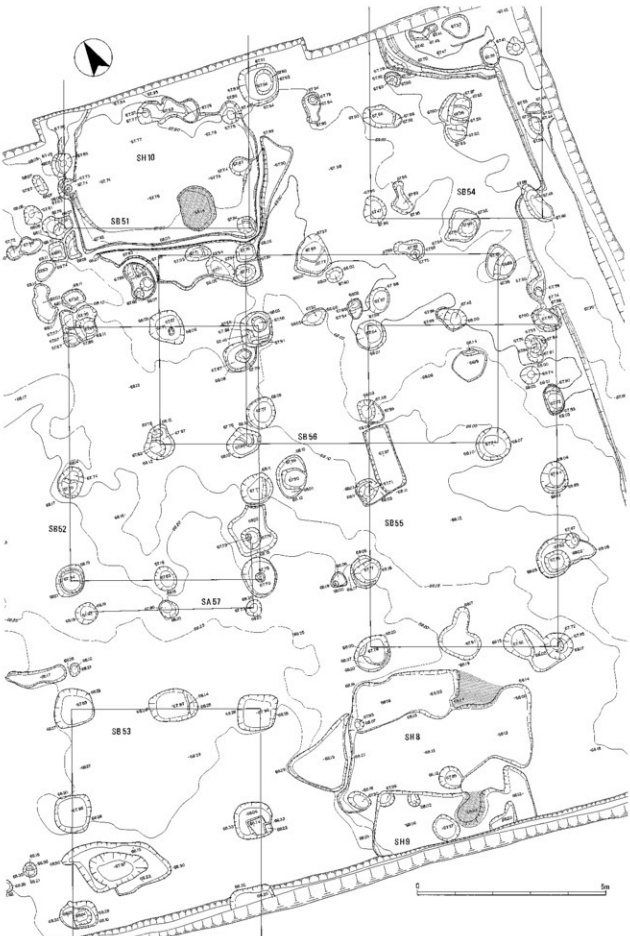


第10図　北奥遺跡Ａ地区詳細図(1)（１：100）

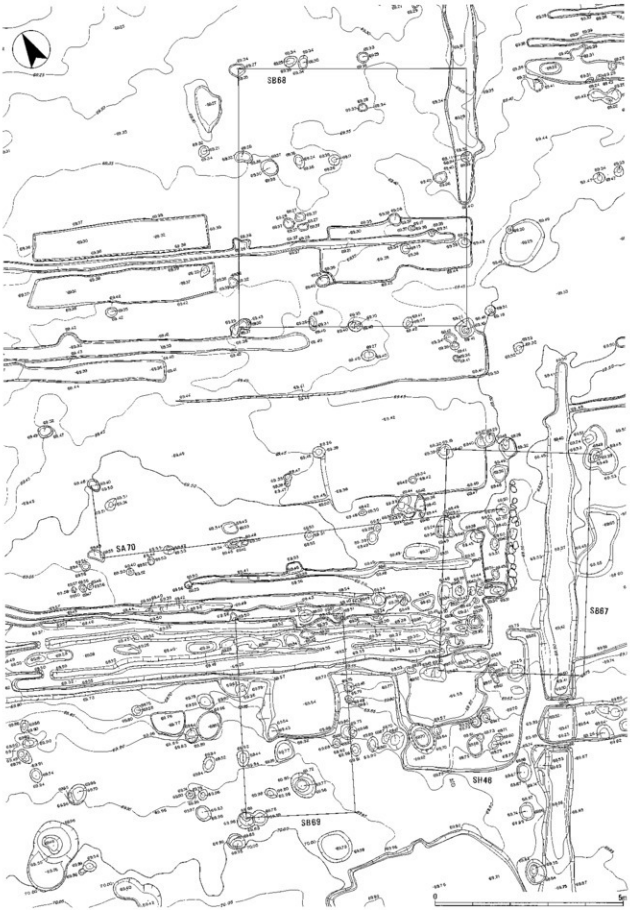
第11図　北奥遺跡Ａ地区詳細図(2)（１：100）



第12図　北奥遺跡Ａ地区詳細図(3)（１：100）



第13図　北奥遺跡Ｂ地区詳細図（１：100）



第14図　北奥遺跡Ｃ地区詳細図（１：100）

第１表　北奥遺跡検出遺構一覧

遺構番号	性　格	時　期	地区	グリッド	調査時遺構名	特徴・形状・計測数値など
ＳＨ１	竪穴住居	奈良？	Ａ	Ｍ18	焼土	焼土3ヶ所、浅い落ち込み
ＳＫ２	土坑	江戸期	Ａ	Ｕ１７	ＳＫ１	
ＳＺ３	落ち込み	平安後期以降	Ａ	Ｏ９	ＳＸ	地割外縁部の落ち込み。
ＳＫ４	土坑	平安後期	Ａ	Ｗ１７	ＳＫ１・ＳＫ２	
ＳＫ５	土坑	平安前期	Ａ	Ｍ１３	ＳＸ（仮）	
ＳＫ６	土坑	奈良～平安末期	Ａ	Ｌ１６	ｐ１１	鍛先・鎌2本を埋納
ＳＤ７	道路側溝	13世紀前半以降	Ａ	Ｗ１４	ＳＤ１	路面部分は石敷き。
ＳＨ８	竪穴住居	奈良末～平安初	Ｂ	Ｇ２８ Ｇ２９	ＳＤ１ ＳＤ１ ＳＢ１	北側にカマド。
ＳＨ９	竪穴住居	奈良末～平安初？	Ｂ	Ｇ２９～３０	ＳＤ２	北側にカマド。ＳＨ８より新。
ＳＨ10	竪穴住居	平安前期	Ｂ	Ｃ２８	ＳＢ１	南側にカマド？
ＳＫ12	土坑	平安初期	Ｂ	Ｃ２４	ＳＸ１	墨書土器あり。
ＳＨ11	竪穴住居	平安前期	Ｂ	Ｂ３０	ＳＢ１・ＳＢ５	堆土内に平安後期のピットあり
ＳＤ13	溝	鎌倉前期	Ｂ	Ｃ３１	ＳＤ１	地割に影響を与えている。
ＳＫ14	土坑	鎌倉前期	Ｃ	ロ１４	ＳＫ１	緑釉陶器片
ＳＫ15	土坑	平安末期	Ｃ	リ１３	ＳＫ１	土器良好
ＳＫ16	土坑	平安後期	Ｃ	チ１２	ＳＫ９	
ＳＫ17	土坑	平安末期	Ｃ	チ１２	ＳＸ７	炭化物、焼土混じり。土器良好、耳皿、ての字状口縁皿あり。
ＳＤ18	溝	平安末期	Ｃ	チ１３	ＳＤ２	ベンガラ付着の陶器小椀
ＳＫ19	土坑	平安末期	Ｃ	チ１４	ＳＫ７ ＳＫ８	調査時ＳＫ８は、下部で検出した落ち込みに相当する。
ＳＤ20	溝	室町期	Ｃ	チ１９	ＳＤ１	
ＳＫ21	土坑	鎌倉前期	Ｃ	チ２０	ＳＫ４	
ＳＫ22	土坑	室町期	Ｃ	チ２２ チ２３	ＳＫ２ ＳＸ１	
ＳＫ23	土坑	室町期	Ｃ	チ２４ ト２４ ト２５	ＳＫ２ ＳＫ２ ＳＫ２	土器良好
ＳＫ24	土坑	室町期？	Ｃ	チ３０	ＳＫ１	横刻のある石硯
ＳＫ25	土坑	室町後期	Ｃ	チ３２	ＳＫ２	
ＳＫ26	土坑	室町後期	Ｃ	チ３３	ＳＫ３	土器良好
ＳＤ27	溝	室町後期	Ｃ	チ３３	ＳＤ１	
ＳＸ28	火葬坑	室町以前	Ｃ	チ３５	ＳＸ１	土坑外縁部は被熱。銭貨６枚、火葬骨、炭
ＳＤ29	溝	鎌倉期以降	Ｃ	チ３７	ＳＤ１	
ＳＤ30	溝	鎌倉前期	Ｃ	チ３８	ＳＤ１	土師
ＳＫ31	土坑	鎌倉前期	Ｃ	チ３９	ＳＫ１	
ＳＫ33	土坑	鎌倉前期	Ｃ	チ３９	ＳＫ４	
ＳＫ32	土坑	鎌倉後期	Ｃ	チ３９	ＳＫ２	
ＳＫ34	土坑	平安末期	Ｃ	チ４０	ＳＫ１	
ＳＫ35	土坑	平安末期	Ｃ	ト１２ ト１３	ＳＫ６ ＳＸ４ ＳＫ４	黒色土器、灰釉陶器底あり。
ＳＫ36	土坑	平安末期	Ｃ	ト１３	ＳＫ８	
ＳＫ37	土坑	平安後期～	Ｃ	ト１３	ＳＫ５	須恵形鍋
ＳＫ38	土坑	平安末～鎌倉前期	Ｃ	ト１４	ＳＫ２ ＳＫ３	土器良好
ＳＫ39	土坑	平安末期	Ｃ	ト１４	ＳＫ１	擂状
ＳＺ40	埋納坑？	江戸期	Ｃ	ト１４	ＳＫ３	ＳＫ３８の上面、寛永通寶５枚。
ＳＫ41	土坑	平安末期	Ｃ	ト１５	ＳＫ４	
ＳＺ42	落ち込み	室町後期	Ｃ	ト２２ ト２３	ＳＸ１ ＳＫ１	石硯　局部磨製石斧混入
ＳＤ43	溝	室町前期？	Ｃ	ト３４	ＳＤ１	
ＳＫ44	土坑	鎌倉後期	Ｃ	ト４１	ＳＫ６	
ＳＫ45	土坑	不明	Ｃ	ホ１２	ＳＫ５	灰釉陶器あり
ＳＨ46	竪穴住居	（鎌倉前期）	Ｃ	ホ１４	ＳＢ１	北側に焼土、土師質土器（ロクロ土師器）や13世紀の土器を含むが、元は奈良場の竪穴住居か？
ＳＫ47	土坑	平安後期～末期	Ｃ	ホ１５	ＳＫ２	
ＳＫ48	土坑	鎌倉後期	Ｃ	ト４３	ＳＫ１	
ＳＫ49	土坑	鎌倉後期	Ｃ	ト１５	ＳＫ２	
ＳＨ50	竪穴住居	奈良末～平安初	Ｂ	Ｂ３０	ＳＢ１	

第２表　北奥遺跡検出掘立柱建物・柱列一覧

遺構名	地区	グリット	ピット番号	ピット遺物の時期	建物時期	規模(東西間×南北間・m)	主軸	方位 (N基準)	備　考
ＳＢ５１	B	C28	8，9		平安前期	２？(4.8)×２(4.0)以上	南北	N31°E	
		C29	1，7	1‥‥製塩土器					
ＳＢ５２	B	D28	1，			２(5.0)×３(6.8)	南北	N31°E	
		D29	1，						
		E27	1，						
		E29	1，4，						
		F28	2，						
ＳＢ５３	B					２(5.0)×２(5.0)以上	南北	N31°E	
ＳＢ５４	B	C30	1，3，4，		平安初期	２(4.4)×１(2.3)以上	南北	N31°E	
		C31	2，						
		D30	5，						
		D31	4，						
ＳＢ５５	B	D30	2，3	3‥‥土師器甕	平安前期	２(5.0)×４(8.4)	南北	N31°E	
		D31	1，						
		E30	2，						
		E31	1，						
		F29	1，	灰釉陶器（平安前期）					
		F30	1，2，3						
		G30	1，	奈良末？土師器					
ＳＢ５６	B	C29	4，			４(9.1)×２(5.0) 西面は庇？	東西	N31°E	
		D29	2，4，ＳＫ３						
		D30	4，						
		E28	2，						
		E29	2，3，	2‥‥奈良期？土師器					
ＳＡ５７	B	F28	1，3，			２(4.6)×１(1.8)	東西	N29°E	
		E28	1，						
ＳＢ５８	A	R18	ＳＫ１			２(3.9)×３(6.1)	南北	N20°E	
		S18	1，						
ＳＢ５９	A	M12	2，3，6，ＳＫ１		奈良後半	２(4.0)×３(5.8)	南北	N17°E	
		N12	ＳＫ１，３						
ＳＢ６０	A	M15	1，			３(6.6)×２(4.1)	東西	N14°E	
		N14	1，						
ＳＢ６１	A	U19	2，			３(5.6)×１(4.2)	東西	N31°E	
ＳＢ６２	A				平安後期	４(10.2)×２(4.0)？	東西	N20°E	ＳＡ64が伴うと考えられる。
ＳＢ６３	A	Ｎ１３	2，		平安末期	２(4.8)×３(6.7)	南北	N18°E	
		Ｏ１３	1，	12世紀代土師器片					
		Ｏ１２	3，						
		Ｏ１１	6，						
		Ｎ１１	2，						
ＳＡ６４	A	Ｏ１１	3，		平安後期	４(6.0)×３(9.2)	南北	N18°E	ＳＢ62に伴うと考えられる。
ＳＢ６５	C	リ１４	2，			３(6.3)×２(4.8)	東西	N23°E	
		ト１４	1，						
ＳＢ６６	C	チ１４	9，	11～12世紀代土師器片	平安末期	１(1.9)×２(3.8)	東西？	N23°E	調査区外に広がる。
		リ１４	3，	11～12世紀代土師器片					
		リ１５	2，						
		チ１５	4，5	5‥‥12世紀代土師器					
ＳＢ６７	C	へ１２	ＳＫ２			２(3.8)×３(5.9)	南北	N33°E	
		ホ１２	ＳＫ２						
ＳＢ６８	C	ホ１１	1，			３(6.0)×３(6.8)	南北	N31°E	
ＳＢ６９	C	ニ１４	3，		鎌倉前期	２？(2.9)×３(5.2)	南北	N28°E	
		ニ１３	3，	土師器・山茶椀６型式					
ＳＡ７０	C	ハ１２	5，		平安末期	４(7.4)×１(1.8)	東西	N25°E	
		ニ１２	1，						
		ホ１２	1，						
		へ１２	6，	11末～12世紀代土師器片					

掘立柱建物ＳＢ59出土土器(６)　６は土師器甕で、８世紀後半頃のもの。

土坑ＳＫ４出土土器(７)　７は土師器皿で、口縁部外面には２単位のヨコナデが確認できる。11世紀後葉頃のものであろう。

柱列ＳＡ64出土土器(８・９)　８・９は灰釉を漬け掛けした陶器椀で、灰釉陶器の最終形態に相当する。11世紀後半頃のものであろう。

落ち込みＳＺ３出土土器(10)　10も灰釉を漬け掛けした陶器椀で、11世紀後半頃のものであろう。

道路側溝ＳＤ７出土土器(11)　尾張産の陶器椀である。13世紀前半頃に相当する。

Ａ地区ピット出土土器(12～16)　ピットから出土した土器をここにまとめた。黒色土器椀(12)、土師器台付皿(13)、灰釉陶器碗(14・15)、志摩式製塩土器(16)などがある。概ね平安時代前半から後葉のもの。

土坑ＳＫ２出土土器(17・18)　17は肥前産と考えられる染付の蓋で、外面には山水が描かれている。18は陶器行平鍋で、片口と把手が付く。底部には小さな３足が見られる。これらは概ね19世紀代のものと考えられる。

Ａ地区遺構外出土土器(19～23)　概ね12世紀代のものである。

ｂ　Ｂ地区の遺物

竪穴住居ＳＨ８出土土器(24～29)　24～26は須恵器、27～29は土師器。27は杯Ｃで、外面はヘラケズリのみを施している。28は杯Ａで、底部外面には墨書が見られる。これらの土器は、奈良時代末期の８世紀後葉頃に相当するものであろう。

竪穴住居ＳＨ10出土土器(30～40)　30～33・38～40は土師器、34～37は須恵器。須恵器は生焼けのものを含んでいる。38・39の甕は、口縁部が内傾するものである。これらの土器は、平安時代初期の９世紀前半頃に相当するものであろう。

竪穴住居ＳＨ11出土土器(41～43)　41・42は須恵器、43は土師器。平安時代初期の９世紀前半頃に相当するものと考えられる。

土坑ＳＫ12出土土器(44)　44は土師器杯Ａで、底部外面には「南」の墨書が見られる。奈良時代末期のものと考えられる。

掘立柱建物ＳＢ51出土土器(45～47)　45は須恵器壺Ｌ。46は志摩式製塩土器、47は黒色土器椀である。いずれも平安時代前期頃のものと考えられる。

掘立柱建物ＳＢ54出土土器(48)　48は須恵器杯Ｂ。奈良時代末～平安時代初頃のものと考えられる。

掘立柱建物ＳＢ55出土土器(49)　49は土師器甕。奈良時代後葉頃のものと考えられる。

Ｂ地区ピット出土土器(50～57)　ピット出土遺物のうち、奈良～平安時代前半のものをここにまとめた。54は剥離が激しいものの、外面にヘラケズリを施し、口縁部が内側に肥厚する精緻な土器である。

溝ＳＤ13出土土器(58)　58は土師器小皿。13世紀前半頃のものかと考えられる。

Ｂ地区遺構外出土土器(59)　59は、遺構に伴わなずに出土した土器である。12世紀頃の土師質土器で、底部には焼成後の穿孔が見られる。

ｃ　Ｃ地区の遺物

竪穴住居ＳＨ46出土土器(60)　60は土師器皿Ａ。奈良時代後半頃のものと考えられる。

土坑ＳＫ14出土土器(61～63)　61は土師器小皿、62は土師器甕、63は陶器椀（山茶椀）である。概ね13世紀前半頃のものと考えられる。

土坑ＳＫ15出土土器(64～75)　64・65・75は土師器、66～72は土師質土器、73・74は陶器。土師器には、口縁部に２単位のヨコナデが見られるもの(65)と１単位のもの(64)がある。土師質土器には皿(71・72)がある。陶器類は尾張産のもの。これらは、概ね13世紀前半頃に相当する。

土坑ＳＫ17出土土器(78～82)　78は土師小器皿。79も土師器小皿で、これは「て」の字状口縁を呈する。80～82は土師質土器。82は成形後に口縁部の２ヶ所を折り返すもので、いわゆる「耳皿」である。これらは概ね12世紀前半頃のものであろう。

溝ＳＤ18出土土器(83～85)　83・84は土師質土器小皿、85は陶器小椀。12世紀後半頃のもの。

土坑ＳＫ19出土土器(86～91)　86～89は土師質土器、90・91は灰釉陶器である。11世紀後半頃のものであろう。

土坑ＳＫ21出土土器(92)　92は常滑産の陶器壺。15世紀代頃のものであろうか。

土坑ＳＫ24出土土器(93)　93は、13世紀前葉頃の尾張産陶器椀である。

溝ＳＤ30出土土器(94～97)　94は土錘。95・96は土師器小皿、97は陶器椀。13世紀中葉頃のものと考えられる。

土坑ＳＫ31出土土器(98～100)　98は土師器小皿。99は白磁皿で、内面には圏線がめぐる。100は陶器椀。これらは13世紀初頃頃のものであろう。

土坑ＳＫ32出土土器(101・102)　101は土師小器皿、102は尾張産陶器椀。13世紀後半頃のもの。

土坑ＳＫ33出土土器(103)　103は尾張産陶器椀で、13世紀初頃頃のもの。

土坑ＳＫ34出土土器(104・105)　いずれも土師器小皿で、13世紀前半頃のものと考えられる。

土坑ＳＫ35出土土器(106～110)　106は土錘。107は土師質土器小皿、108は土師器皿、109は黒色土器椀、110は陶器壺。12世紀後半頃のものであろう。

土坑ＳＫ36出土土器(111)　111は土師質土器皿で、12世紀前半頃のものか。

土坑ＳＫ37出土土器(112・113)　いずれも土師器である。112は清郷形鍋で、11世紀後半頃のもの。

土坑ＳＫ38出土土器(114～149)　まとまった量が出土している。114～130・146～148は土師器、131は白磁、132～136は土師質土器、137～145は陶器。土師器皿・小皿は口縁部に２単位のヨコナデを施すものを中心とする。土師質土器には極小の小皿(137)がある。131は大宰府分類Ⅳ類の碗。陶器椀は尾張・三河産のものがある。甕はいずれも南伊勢地域のもの。これらは概ね12世紀後葉頃に相当する。

土坑ＳＫ39出土土器(150～152)　150は土師器小皿、151・152は土師質土器小皿。概ね12世紀後葉頃のものであろう。

土坑ＳＫ41出土土器(153・154)　153は土師器皿、154は土師器甕。概ね12世紀後葉頃のもの。

土坑ＳＫ44出土土器(155)　155は、13世紀後葉から14世紀前半頃の尾張産陶器椀である。

土坑ＳＫ45出土土器(156)　156は11世紀前半頃の灰釉陶器碗である。

土坑ＳＫ47出土土器(157～159)　157・158は土師質土器小皿。159は瓦器椀で大和型。これらは概ね12世紀後半頃のもの。

土坑ＳＫ48出土土器(160)　160は14世紀前半頃の尾張産陶器椀。

土坑ＳＫ49出土土器(161)　161は13世紀前葉頃の土師器小皿。

掘立柱建物ＳＢ66出土土器(162・163)　いずれも土師質土器。162は耳皿、163は小皿。12世紀前半頃のものであろう。

掘立柱建物ＳＢ69出土土器(164・165)　いずれも土師器。13世紀中葉頃のものであろう。

Ｃ地区ピット出土土器(166～177)　Ｃ地区のピット出土土器のうち、平安時代後半から鎌倉時代に相当するものをここにまとめた。土師器、土師質土器がある。174は土師質土器椀で、この形態は珍しい。

土坑ＳＫ22出土土器(178・179)　いずれも中北勢系の土師器皿である。内面にナデによる段が見られる。15世紀中葉～後葉のものと考えられる。

土坑ＳＫ23出土土器(180～185)　180～183は中北勢系羽釜。182は不明だが、それ以外は２個１対(合計４個)の焼成前穿孔が復元できる。184は常滑産練鉢、185は信楽産擂鉢である。これらは概ね15世紀後半頃に相当する。

土坑ＳＫ25出土土器(186)　186は瀬戸産の折縁小皿で、古瀬戸後Ⅳ期新に相当する。

土坑ＳＫ26出土土器(187～189)　いずれも南伊勢系鍋で、第４段階ｂに相当し、15世紀後葉頃のものと考えられる。

溝ＳＤ27出土土器(190・191)　190は中北勢系羽釜、191は南伊勢系羽釜で、15世紀後葉頃のもの。

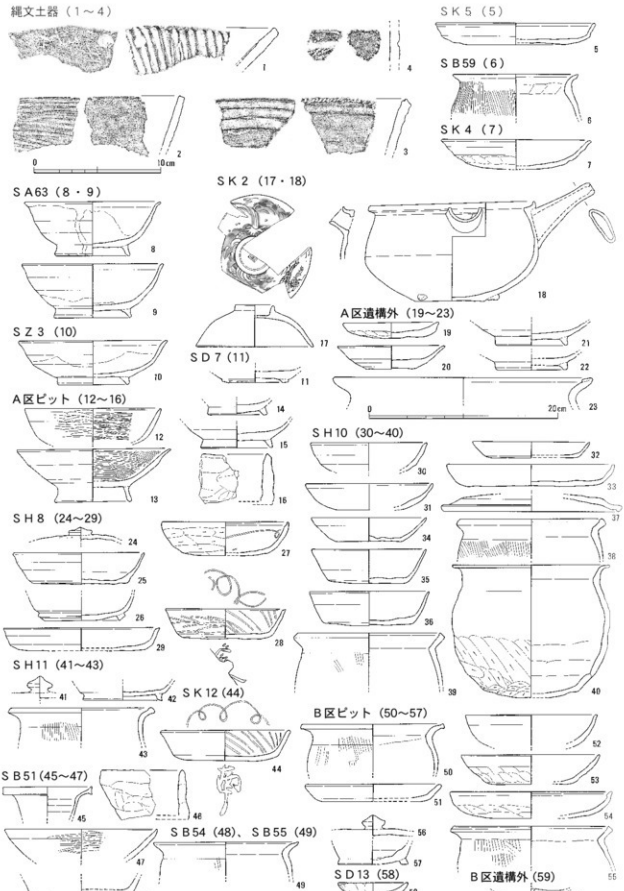
溝ＳＤ29出土土器(192)　192は中北勢系の土師器小皿と考えられる。15世紀後半頃のものか。

落ち込みＳＺ42出土土器(193・194)　193は中北勢羽釜、194は常滑産陶器壺。15世紀後葉頃のもの。

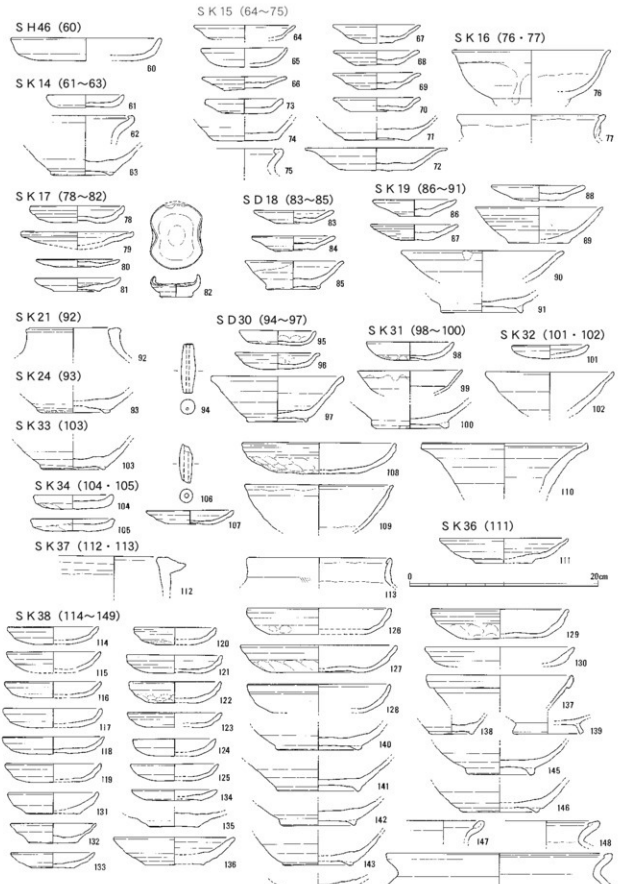
溝ＳＤ43出土土器(195・196)　いずれも中北勢系の土師器皿で、15世紀中葉前後のもの。

Ｃ地区ピット出土土器(197)　Ｃ地区のピットのうち、室町時代にに相当するもの。197は中北勢系の土師器小皿で、15世紀後半頃のもの。

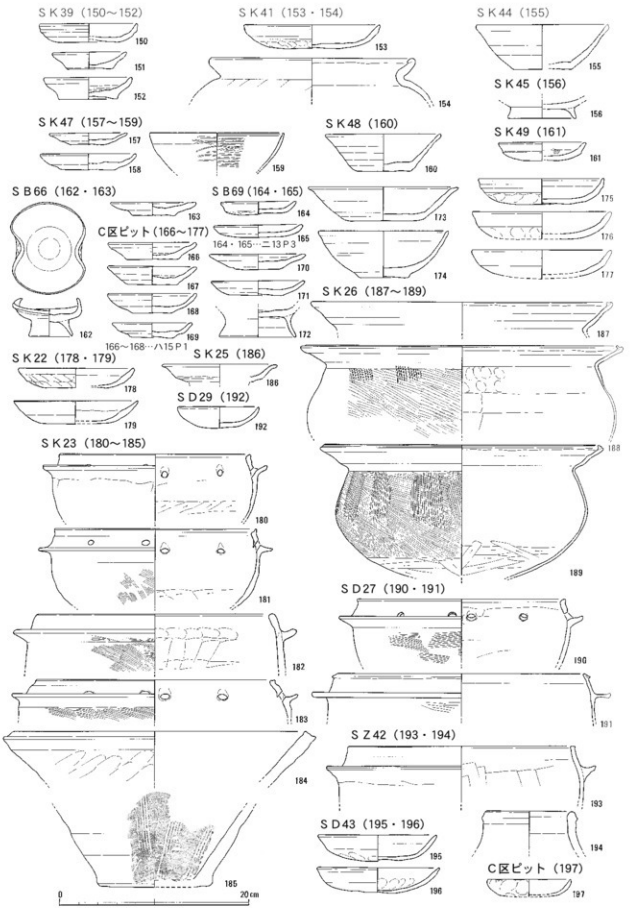
Ｃ地区遺構外出土土器(198～213)　Ｃ地区の遺構外から出土した土器をここにまとめた。198は奈良時代頃の土師器甕、199・200は13世紀前半頃の土師器皿、201～208は12世紀前半から13世紀前葉頃の土師質土器、209～212は12世紀後半前後の陶器椀である。213は青磁椀の底部で、内面見込みには里芋の葉の



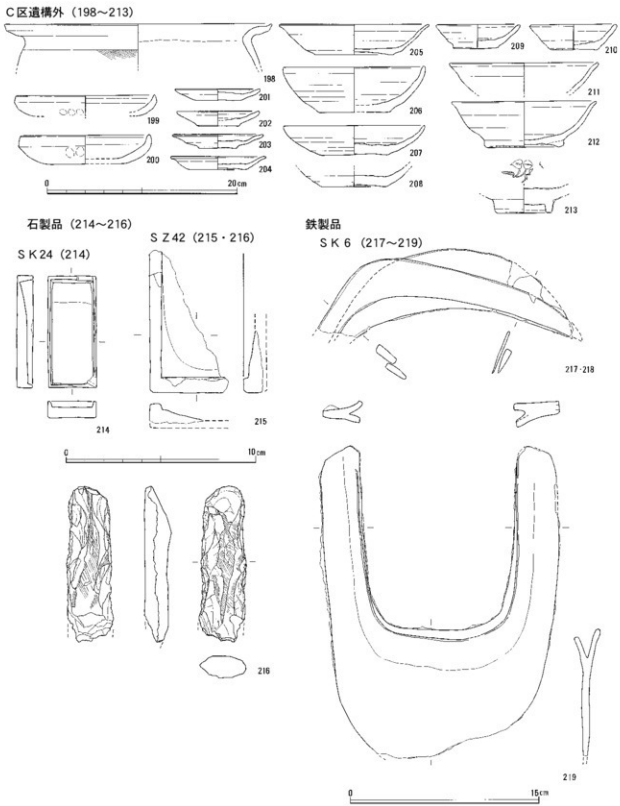
第15図　北奥遺跡出土遺物(1)（1～4は1：3、他は1：4）



第16図　北奥遺跡出土遺物(2)（1：4）



第17図　北奥遺跡出土遺物(3)（１：４）



第18図　北奥遺跡出土遺物(4)（214・215は１：２、他は１：４）

ようなスタンプ文が見られる。

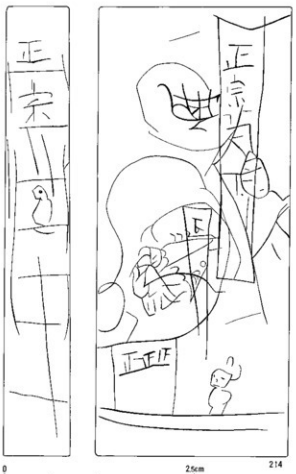
d　石製品・金属製品

硯(214・215)　214は全長5.9cm、幅2.6cm、高さ0.9cmの小形の方形硯である。あまり使い込まれていない。外面には戯画を含む線刻がある。線刻には、明らかに花押と考えられる線刻のほか、人物らしき線刻も見られる。また、旗竿状の区画内には「正宗」と線刻されている。「正宗」の刻書は、側面にも見られる。花押の形態から見て、15世紀後半から16世紀前半頃のものと考えられる。215はかなり使い込まれた方形硯で、陸部の一端のみが遺存していた。

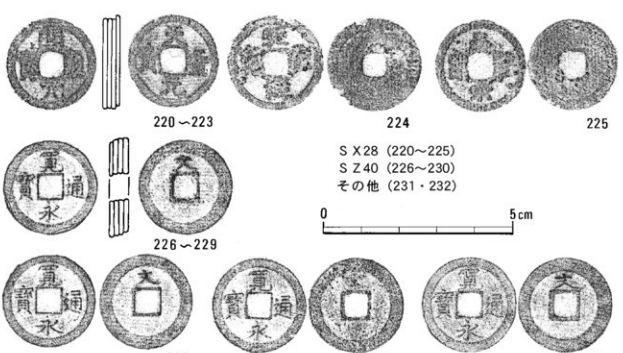
砥石(216)　216は結晶片岩製の砥石。部分的に研磨面がある。元は縄文時代の打製石斧であった可能性がある。

鉄鎌(217・218)　後述の鋤先(219)とともに、ＳＫ６から出土したもの。いずれも柄部を欠損する。217は直線的な刃部で厚みがあり、218は弧状を呈する刃部で薄手である。正確な所属時期は不明だが、形態から見て、８世紀以降、12世紀頃までのものと考えられる。

鋤先(219)　先述の鉄鎌(217・218)とともに、ＳＫ６から出土した。刃幅約17cm、全長約24.5cmのもの



第19図　硯（214）の線刻（実物の２倍）



第20図　北奥遺跡出土遺物(5)銭貨（１：１）

で、内側は木芯部を装着するために袋状を呈している。刃先は片減りしており、よく使い込まれている。

銭貨(220～232)　220～223は火葬坑ＳＸ28から出土した。６枚が重なって出土しており、いわゆる「六文銭」に相当する。220～223の４枚は錆着しており、開元通寶（中国・唐）と天聖元寶（中国・北宋）が判明するのみである。224は熙寧元寶、225は皇宋通寶（いずれも中国・北宋）である。６枚の銭種は、つぎのように重なっていた。

天聖元寶（表）－不明－不明－開元通寶（裏）－皇宋通寶（表）－天聖元寶（表）

226～232は、いずれも寛永通寶である。226～230はＣ地区ＳＺ40からまとまって出土した。

6　まとめと検討

北奥遺跡の発掘調査では、８～９世紀頃、11～13世紀頃、15世紀頃の３時期を中心とする時期の遺跡が確認された。ここでは調査の成果をまとめるとともに、若干の検討を行っておく。

a　古代前半期の状況

当遺跡の密度が増加するのは、古代前半期の奈良時代後葉頃から平安時代前葉頃で、都城編年[4]では、平城Ⅴ（８世紀第４四半期）から平安Ⅰ新（９世紀前半）にあたる。とくにＢ地区では、竪穴住居と掘立柱建物とを組み合わせた規則性の高い建物群が見られる。墨書土器も２個体以上出土しており、公的施設の可能性が高い、何らかの重要地と認識できる。

安濃川を挟んだ北奥遺跡の対岸は、鈴鹿駅家から伊勢神宮へと至る官道（伊勢道）の通過想定地であり[5]、北奥遺跡付近は安濃郡の入口にあたる。北奥遺跡の企画的な建物群は、安濃郡衙が設置したその関連施設の可能性があるのではないか。

b　古代末～中世前期の北奥遺跡

平安時代中期頃（10世紀頃）の遺構は確認できない。11世紀後葉から13世紀後葉頃の時期に再度遺跡の密度が増加し、掘立柱建物群が形成されている。

土器類では、耳皿の出土が注目できる。この時期の耳皿は出土事例が少ないが、北奥遺跡では土師器・土師質土器双方のものがあり、興味深い。

土師器皿類の状況も興味深い。当遺跡で中心となる土師器皿類は、口縁部外面に２単位のヨコナデを施す、「京都系土師器」の範疇に含まれるものである。京都系土師器と同種の手法は、三重県では中勢地域を中心に認められる。当遺跡からは、１点ではあるが「て」の字状口縁小皿も出土している。当地は、大きくは京都系土師器の影響下にある地域として見ることができる[6]。

また、この時期の遺構と考えられるものに、鉄器を埋納した土坑ＳＫ６がある。何らかの祭祀的な行為と考えられる。

d　中世後期の北奥遺跡

14世紀代の状況は判然としないが、15世紀後半頃から16世紀前葉頃に遺跡の密度が増加する。この時期の明確な建物遺構は確認できないが、この時期の土器を含むピットもあり、何らかの集落が営まれていたことは確かである。

この時期の遺物として注目できるのは、戯画が線刻された硯である。線刻には花押があり、それは当時の武士が用いていたものに類似する。硯に刻まれた「正宗」の名は、この硯の持ち主であろう。これらのことから、「正宗」は武士であり、当遺跡近隣に居住した人物と考えられる。

当遺跡の一部が該当する雲林院地区には、戦国期に雲林院氏の本拠地であった。雲林院氏は国人領主長野氏の一族であるとともに、伊勢国司北畠氏とも有機的な関係を持つ領主権力であった。「正宗」は、雲林院氏に関係した人物であると考えるのが妥当であり、その居住地は北奥遺跡を含む近隣地に求めることができるのではないだろうか。　　（伊藤）

＜註＞

(1)昭和62年度三重県教育委員会調査。

(2)三重県埋蔵文化財センター『平成３年度農業基盤整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告』第１分冊（1991年）

(3)雲林院氏と下川遺跡については、三重県埋蔵文化財センター『伊勢寺廃寺・下川遺跡ほか』（1990年）を参照のこと。

(4)都城編年と分類については、古代の土器研究会編『古代の土器１　都城の土器集成』（1992年）を参照した。

(5)足利健亮『日本古代地理研究～畿内とその周辺における土地区画の復元と考察～』（大明堂　1985年）

(6)このことについては、伊藤裕偉「中世成立期における伊勢の土器相」（『鳴抜』Ⅱ　三重県埋蔵文化財センター　2000年）を参照。

Ⅱ　出口遺跡

1　調査の経過

出口遺跡は、安芸郡芸濃町雲林院字出口地内に所在する遺跡である。発掘調査は昭和63年度事業として実施したもので、排水路部分に相当する立会調査である。1988年10月７日から開始し、同年10月12日に終了した。最終的な調査面積は190㎡であった。

当遺跡は、昭和63年度には「下川遺跡」として実施されているが、『芸濃町遺跡分布地図』（町教育委員会　2002年）作成段階では「出口遺跡」として登録されているので、ここではそれに従い出口遺跡とする。なお、下川遺跡は平成元（1989）年度に実施されており、すでに報告書も刊行されている（三重県埋蔵文化財センター『伊勢寺廃寺・下川遺跡ほか』1990年）。

2　調査の成果

a　遺構

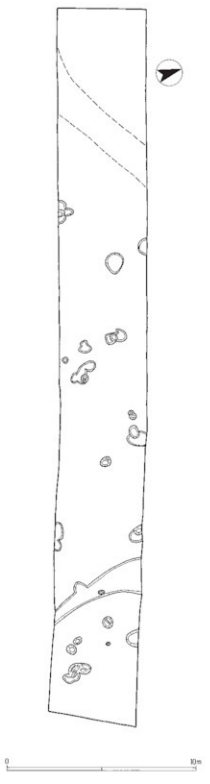
発掘調査の結果確認された遺構は、ピットおよび溝がある。調査区の東側では、遺構が形成される以前と考えられる自然流路がある。ピットは建物としてまとまるものではなかった。

b　遺物

出土遺物は極めて少ない。図示できるものは無かった。13世紀代と考えられる陶器椀（山茶椀）のほか、瓦器椀の破片が見られた。他には、中世に相当すると考えられる土師器片が見られた。

3　まとめ

平成元年度に実施された下川遺跡発掘調査では、11～16世紀にかけての良好な遺構・遺物が確認されている。出口遺跡の調査では、明確な遺構・遺物こそ認められなかったが、中世前期の遺跡と考えられる。前章で触れた北奥遺跡を含め、雲林院・多門地区には中世遺跡が広範囲に展開していると見ることができよう。　（伊藤裕偉）



第21図　出口遺跡調査区平面図（１：200）

Ⅲ　椀田遺跡

1　調査の経過

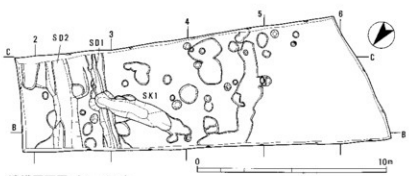
椀田遺跡は津市芸濃町多門字椀田に所在する。昭和63年度県営圃場整備事業（芸濃南部地区）に伴って発掘調査が実施された。調査は、昭和63年10月12日から開始し、同年10月28日に終了した。調査面積は97㎡。発掘調査区は、細長いトレンチ状（東西約５m、南北約20m）を呈している。

2　調査区の立地と基本層位

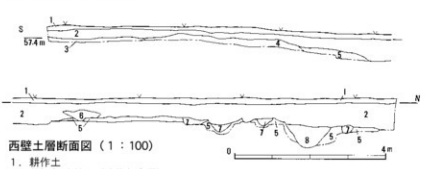
椀田遺跡は、安濃川中流右岸に位置し、南側背後の丘陵からすぐ北隣の安濃川に向かって、半島状に張り出した段丘北端部に立地する。この段丘は西から東に緩傾斜し、東方の北神山集落がのる一段高い段丘との間に、狭くて浅い鞍部（沖積地）を形成している。調査区は本遺跡範囲の中では東縁辺部の極く一部にあたる。現況は畑。標高は約57m。

調査区の基本層位は第１層・耕作土（表土）10～20㎝と、第２層・茶褐色砂質土（遺物包含層）が全体に広がる。以下、第３層・黄褐色細砂層、第４層・茶褐色砂質土層、第５層・茶褐色粘質土層などと変化するが、これらは部分的にしか認められず、傾斜地特有の土層のあり方を示している（第22図）。このうち、第５層の茶褐色粘質土層が遺構検出面となったが、さらに掘り下げた部分もある。

3　検出した遺構

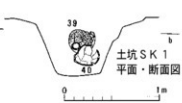


遺構平面図（１：200）

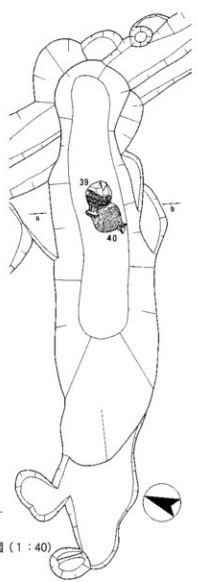


西壁土層断面図（１：100）

1．耕作土
2．茶褐色砂質土（遺物包含層）
3．黄褐色細砂層
4．茶褐色砂質土（礫混）
5．茶褐色粘質土（黄褐色土ブロック混）
6．茶褐色粘質土
7．茶褐色粘質土（黄褐色土ブロック少量混）
8．淡茶褐色粘質土



土坑ＳＫ１
平面・断面図（１：40）



第22図　椀田遺跡関係図

発掘調査の結果確認された遺構には、弥生時代中期・中世前期のものがある（第22図）。ただし、出土遺物は縄文時代中・晩期、古墳時代後期のものも含まれている。

a　弥生時代中期の遺構

この時期の遺構としては、土坑１基がある。

土坑ＳＫ１　調査区北部で検出され、南北約5.8m、東西約1.2mの長楕円形の土坑である。遺構検出面からの深さは約65cm。北端部は中世の溝ＳＤ１によって削られ、やや不明瞭になっている。この中央部から弥生中期後葉の壺形土器２個体がほぼ完全な形で検出された。調査面積が狭くて確認は出来なかったが、土壙墓ないし方形周溝墓の一辺である可能性がある。

b　中世前期の遺構

中世前期の遺構として、調査区北部に大小２本の溝が並行して検出された。

溝ＳＤ１　土坑１を横断し、東西方向に伸びる遺構で、幅60～80cm、深さ30～40cmの溝である。

溝ＳＤ２　溝１にほぼ並行して東西方向に走る遺構である。幅1.2～1.5mで遺構検出面からの深さ40～60cmである。

4　出土した遺物

出土遺物には、縄文時代から中世に至るものがある。多くは土器類である（第23～25図）。

a　縄文時代中・晩期の遺物

遺構に伴わない状態であるが、縄文時代の遺物が認められる。

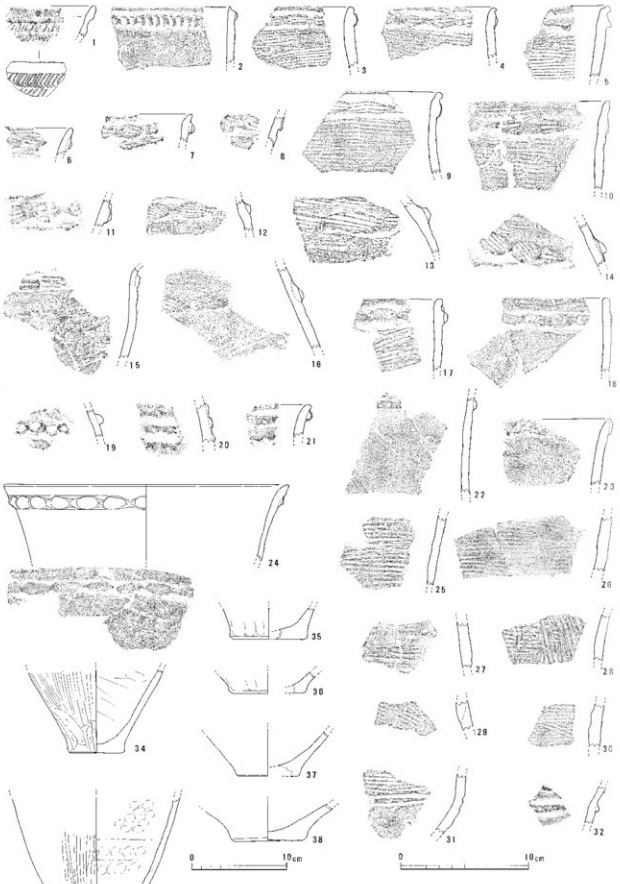
１は縄文中期前葉・北屋敷式土器の口縁部片。中期以前の土器はこの一片のみである。極薄手の独特の土器で口縁部を外面に折り返して肥厚させ、その直下に羽状の押引き刺突が連続する。類例は県内数カ所で散見されるが、安濃川流域以北の資料としては初見である。

２～33・35～37は晩期末葉・突帯文土器およびそれに関連した資料で、ほとんどは馬見塚式に該当する。突帯文の中では３～11のように口縁部が外反し、突帯上を二枚貝の腹縁で押し引いて長楕円形の刻み目をつけたものが最も多い。これらは口端部断面形が細く尖り気味になるか、丸棒状を呈する。これ以外は同じ突帯でも17・24のように条痕によらないものや２のようなＤ字状の刻み目のものがあり、21～23・32は素文と思われる。19・20も突帯上に刻み目を有するが、19は楕王式、20は多条化した、やや細い突帯で胎土・色調も異なり弥生前期・Ⅰ様式に下る可能性が大きい。12～14・18は肩部片。25～31は二枚貝条痕を施したもの。29・30にはわずかに線刻が認められ、31は条痕文の下部を沈線2本で区切る。35～37は突帯文土器の底部片である。

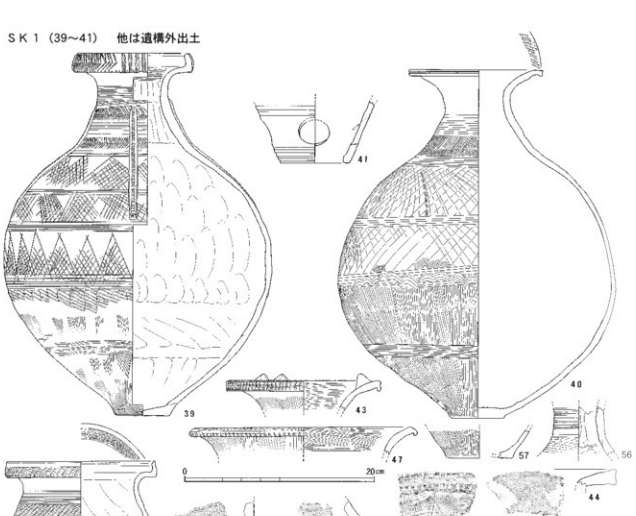
b　弥生時代中期の遺物

土坑ＳＫ１出土土器(39～41)　39は受口状口縁の壺。口縁部は櫛状工具による羽状文を密に施し、その間に４個１単位の棒状浮文を貼り付け、下端に刻み目を入れる。頸部以下には櫛状工具による横線文間に羽状文が２単位施され、その下は同じく横線文間にヘラ状工具で３単位の鋸歯文をややランダムに充填し、最下段は波状文を施す。頸部より体上部には刻目付きの細長い浮文を４箇所垂下させる。通常の壺に比べ丁寧に加飾され、供献用など特別な意図が窺える。40は口縁内面に櫛描列点文、頸部以下は櫛描横線文間に、上から櫛描列点文、次に２単位のヘラ描き斜格子文が巡り、胴部中央では波状文が一部重複して施文される。41も同じ土坑１内から検出された台付壺の台部で、円形の透かしをはさんで上下に凹線文がみられる。これらは上村編年[1]に準拠すると、伊勢Ⅳ－２様式に該当するものであろう。

遺構外出土土器(34・38・42～57)　42は受口状口縁の甕。口縁部は、内外面とも櫛描列点文が密に施され、口縁下端に刻めが付される。体上部には２単位の櫛描横線文に一部重複して、２単位の櫛描列点文が施され、屈曲部より下方には櫛状工具による刻目を付けた突帯が２条巡り、最下段は横線文帯で区切る。入念に製作された、精緻な土器である。Ｂ２・土坑１出土の注記が見られるものの、その遺構が特定できないのは残念であるが、おそらく前述の土坑ＳＫ１出土のものであろう。43～46は壺の口縁部片。43・44は口端に櫛状工具で刻目を付け、43は内面に２個一対の瘤状突起が貼付される。45・46は受口状口縁片。47～52は甕の口縁部片。いずれも外端部を刻む。53～56は頸部ないし体上部片。53はタテ刷毛の下方に櫛描列点文、54はハケ地に沈線、



第23図　椀田遺跡出土遺物実測図(1)　縄文・弥生土器（1～23、25～32　1：3）(24、33～38　1：4）



第24図　椀田遺跡出土遺物実測図(2)　弥生土器（39～43、47、56、57　１：４）（44～46、48～55　１：３）

55は沈線区画内に縄文、56は櫛描横線文と沈線が認められる。底部片では38は壺、34・57は甕である。これらの土器は概ね、中期末葉頃に比定されるが、55は第Ⅲ様式に属する。

c　古墳時代後期の遺物

遺構外から須恵器の蓋が１点のみ出土している。58がそれで内面と外面の一部には焼成時に付着した窯壁の塊が残存している。対岸の椋本付近には東三ツ谷古窯跡群など須恵器窯の分布が知られており、関連が注目される。

e　奈良時代の遺物

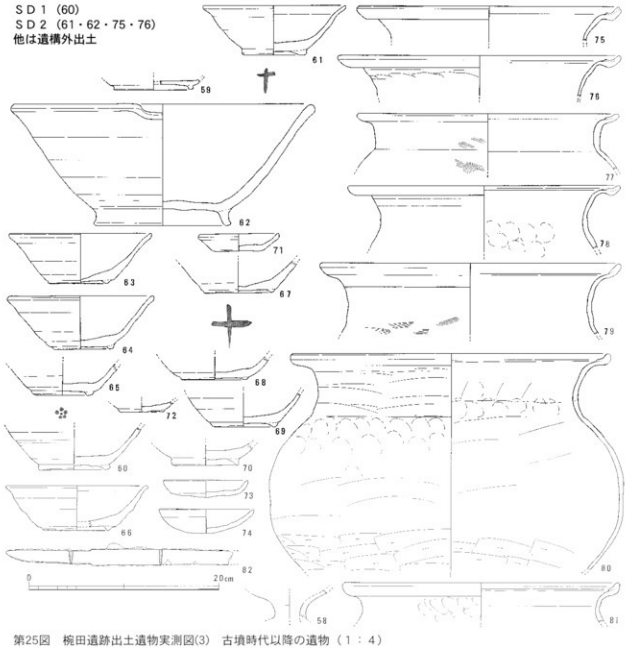
溝１の混入遺物に59の杯身１点がある。底面には糸切痕が残り、面取りされた高台が付く。

d　中世前期の遺物

溝ＳＤ１出土土器　山茶椀(60)が１点出土している。

溝ＳＤ２出土土器　山茶椀(61)・練鉢(62)の各１点と土師器・鍋(75・76)が２点認められる。

遺構外出土遺物　陶器では山茶椀(63～70)、山皿



第25図　椀田遺跡出土遺物実測図(3)　古墳時代以降の遺物（１：４）

(71・72)、土師器には小皿(73・74)、鍋(75～81)がある。82は鉄製品の小刀である。陶器については猿投・知多などの尾張産が多数を占め、60・68・70は渥美産と推定される。このうち、61・67の底面には「十」と記された墨書があり、65の底面にも不明瞭ながら墨書の点文が残る。土師器・鍋はすべて南伊勢系のもので、伊藤氏による分類[2]の第１段階ｂ型式を主体に一部、第２段階ａ型式がみられる。

これらの土器類は、概ね13世紀後半頃のもので、溝の所属時期もそのころに相当する。

5　小結

小面積の調査であったが、遺構では弥生中期の見事な加飾壺が埋納・供献された土坑と中世前期の溝の一部が検出され、成果を収めた。遺物の面では縄文晩期終末の突帯文土器が比較的まとまっており、安濃川水系では下流域の松ノ木遺跡[3]に次ぐ、数少ない好資料が蓄積された。　（奥）

＜註＞

(1)上村安生「伊勢・志摩」(『弥生土器の様式と編年　東海編』木耳社　2002年)

(2)伊藤裕偉「中世南伊勢系の土師器に関する一試論」(『Mieh istory』vol.1　1990年)

(3)竹内英昭ほか『松ノ木遺跡』(『松ノ木遺跡・森山東遺跡・太田遺跡発掘調査報告』三重県埋蔵文化財センター　1993年)

Ⅳ　雲林院・多門地区の遺跡動向と展望

ここでは、全体のまとめとして雲林院・多門地区を中心とした遺跡の動向とその展望を記す。

1　縄文時代の動向

北奥遺跡と梅田遺跡でこの時期の遺物が出土しているが少量である。当該地域の縄文時代資料は、安濃川を挟んだ対岸の大石遺跡に中期後半の充実した資料がある。梅田遺跡では中期前葉の土器が出土しており、北奥遺跡に隣接する雲林院青木遺跡でも後期の良好な土器が出土している(1)。今後この地域全体で時期毎の変遷を辿る作業が必要である。

2　弥生時代の動向

梅田遺跡で中期の良好な資料が確認されている。梅田遺跡では、周溝墓か土壙墓と考えられる遺構からほぼ完形で２個体の壺が出土しており、それは施文の状況やその形状から鈴鹿川上流域で出土する資料との類似性が強い(2)。また、これらの土器類は伊勢湾西岸部のなかでも三河地域との共通性が強いように思われる。それに対し、同じ遺構と想定される受口状口縁甕は近江・伊賀地域との強い共通性を有している。この地域の弥生土器を評価するにあたっては、近接する地域だけでなく、より遠隔地との関係を踏まえた検討が必要である。

3　奈良・平安時代の動向

北奥遺跡では、奈良時代の竪穴住居群と、平安時代の掘立柱建物群が確認された。とくに平安時代前期には、方向を揃え、規格性を有した建物群が確認され、何らかの公的施設である可能性が高い。

安濃郡は、『和名類従抄』(3)に建部・村主・内田・英太・跡部・長屋・石田・駅家・片縣の９郷の所在が記されている。安濃郡の条里型地割を検討した仲見秀雄の検討に拠れば、北奥遺跡のある一帯は建部郷に相当し、11世紀中葉頃には無酒里として把握されていた地にあたるという(4)。

安濃郡条里型地割は、概ねＮ26～27°Ｅを主軸としている。北奥遺跡付近には明確な条里型地割は見られないが、ここで確認された建物群では、規格性のある平安時代前期ではなく、平安時代後期から中世にかけての建物が条里型地割に近い方位を示している。条里型地割に合致する以前に強烈な規格性を有する建物群が形成されるという事例は、他の地域でも多く見られる(5)が、その非連続性については今ひとつよく分かっていないのが現状である。今のところ北奥遺跡の性格は特定できないが、そこには安濃郡だけに止まらない大きな意味が内包されているのである。

4　中世の動向

11・12世紀頃の特徴は、北奥遺跡で出土した京都系土師器に代表される。対岸の大石遺跡で確認された13世紀代の屋敷地から出土した土師器皿類は、京都系土師器からはほど遠い形態である。大石遺跡の土器が北奥遺跡のそれと型式学的につながるものであるとしても、そこには既に京都系土師器の情報を見ることはできない。土師器に見られる12世紀と13世紀の差とは、平安時代・鎌倉時代という時代区分とはまた異なる社会的変化をも表している可能性がある。

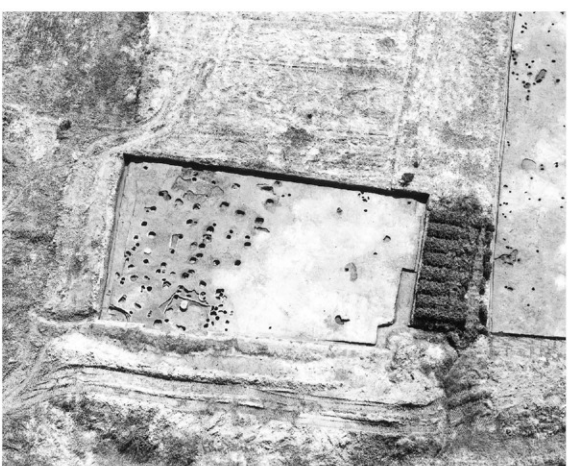
5　中世後期の動向

中世後期の当地は、長野一族の雲林院氏との関わりで考察が必要である。北奥遺跡の状況は、豊富な調査内容を誇る下川遺跡と比較しながら見ていく必要があろう。下川遺跡では集落跡のほか、鍛造遺構なども確認されている。当地最奥部に位置する雲林院城跡が扇の要の位置にあり、その外縁部に集落跡が散在していた状況が想定される。　　（伊藤）

＜註＞

(1)平成元年度芸濃町教育委員会調査。
(2)亀山市教育委員会『笹登志遺跡発掘調査報告』(2005年)など。
(3)京都大学文学部国語国文学研究室編『諸本集成和名類従抄』本文編　臨川書店　1968年)
(4)仲見秀雄「奄芸・安濃・一志郡の条里制」(『伊勢湾西岸地域の古代条里制』東京堂出版　1979年)
(5)松阪市・阿形遺跡（三重県埋蔵文化財センター『打田遺跡・ヒタキ廃寺ほか』1996年)、鈴鹿市・桑名垣内遺跡（同『鈴鹿市中ノ川中流域の考古資料』研究紀要第15･2号　2006年）など。

全景（北上空から）



B 地区全景（北上空から）

土坑ＳＫ６（南から）

硯（214）の線刻

全景（北から）

土坑ＳＫ１遺物出土状況（西から）

報 告 書 抄 録

ふりがな	あのうがわちゅうりゅういきのこうこしりょう
書名	安濃川中流域の考古資料
副書名	
巻次	
シリーズ名	研究紀要
シリーズ番号	１５－３
編著者名	伊藤裕偉　奥　義次
編集機関	三重県埋蔵文化財センター
所在地	〒 515-0325　三重県多気郡明和町竹川５０３　℡ 0596(52)7031
発行年月日	２００６年３月３１日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
北奥遺跡（きたおく）	津市芸濃町（つしげいのうちょう）	24201	ｄ７６	34°48′21″	136°24′50″	19880509～ 19881023	4,600	昭和63年度県営農業基盤整備事業
出口遺跡（でぐち）	雲林院（うりんいん）・多門（たもん）		ｄ７４	34°48′14″	136°24′48″		190	
椀田遺跡（わんだ）			ｄ７７	34°47′56″	136°25′13″		97	

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
北奥遺跡	集落跡	奈良 平安 中世	竪穴住居 掘立柱建物	土師器・須恵器 土師器・陶器	規格的な配列の建物群 中世前期京都系土師器 戯画・花押のある硯
出口遺跡	集落跡	中世	ピット・溝	土師器・陶器	
椀田遺跡	集落跡	縄文 弥生中期 中世前期	土坑（墓？） 溝	土器 土器 土師器・陶器	弥生中期の溝（土坑）内から完形壺２点

要約

北奥遺跡は、安濃川南岸の台地上に立地する。奈良時代から中世後期にかけての集落跡が確認された。とくに平安時代では、規格性を有した掘立柱建物・竪穴住居が並び、当時の安濃郡衙関連の要地であった可能性が高い。中世前期では、京都系土師器が主体となることが判明した。中世後期では、戯画と花押の書かれた硯があり、近隣の国人領主である雲林院氏に関連する人物が当遺跡近隣に居住していた可能性が考えられる。

出口遺跡では、明確な遺構・遺物が確認されなかった。隣接する下川遺跡の縁辺にあたるものと考えられる。

椀田遺跡では、弥生時代中期の溝状土坑が検出され、埋土中から完形の壺が２個体出土した。方形周溝墓か、あるいは土壙墓と考えられる。

安濃川中流域の考古資料
研究紀要第15－３号

2006（平成18）年３月28日

編集・発行　三重県埋蔵文化財センター
印　　刷　㈲山文印刷